

社会福祉教育における「思考」型授業のデザイン

- 理論と実践をつなぐための3ステップ方式の提示 -

山口県立大学 内田充範(06870)

キーワード：グループディスカッション、新聞記事レポート、プレゼンテーション

1. 研究目的

本研究の目的は、社会福祉教育の講義科目において、ソーシャルワーク理論や法制度を実践に結びつける力を修得することによって、卒業後の現場実践における社会福祉専門職としての価値観を基盤とした課題解決のための思考力を養う授業スタイルの構築にある。

研究者は、現在の3年生から、1年次後期のソーシャルワーク論、2年時前期の福祉行財政論、3年次前期の公的扶助論を担当している。理論や法制度は、相互に密接な関係性を持ちながら現代社会に生じる課題解決の実践につながるものである。この理論と実践をつなぐ課題解決能力を段階的に修得するための「思考」型授業のデザインを試みた。

2. 研究の視点および方法

本学部では、2006年度入学生から、社会福祉教育のコンピテンス評価を行っている。2006年度入学生の最終評定結果を検証したところ、基本的学習能力の中で下位を占めた「自分の意見を整理し、言葉で表現することができる」(5段階評定値3.23)、「文献や資料を収集するために図書館等を利用できる」(同3.35)、「プレゼンテーションを的確にすることができる」(同2.79)の能力向上の必要性を感じた。

このため、研究の視点としては、まず、1年次後期のソーシャルワーク論において、6人程度のグループディスカッションを行うことにより、自分の意見を持つことやグループメンバーの意見を聴くことで考えを深めることをねらいとした。次に、2年次前期の福祉行財政論においては月1回の新聞記事レポートを課題とすることで社会問題に関心を持ち、新聞講読を発展させ文献や資料収集能力の修得をねらいとした。さらに、3年次前期の公的扶助論では、生活保護の実践事例等から問題を発見し、理論や法を関連付けて解決方法を考える力を養い、その考えを他の学生に伝えるプレゼンテーション能力の修得をねらいとしている。つまり、授業に取り入れた「グループディスカッション 新聞記事レポート プレゼンテーション」というステップを経て、実践力としての「自分の意見を持つ

現代的課題に関心を持ち調べる 法・制度や理論を実践と結びつけて考えたことを伝える」という「思考」型授業をデザインし、実際に3つの講義が先述した能力向上に役立ったかをアンケート調査により明らかにすることとした。

現在、対象学生は3年生で公的扶助論を履修中のため、本研究の最終的な分析は前期講義終了を待たなければならないが、2011年5月26日の講義終了後に、それぞれの講義が学習能力の向上に役立ったか5段階評価のアンケート調査を実施した。

3. 倫理的配慮

アンケート調査は無記名とし、調査内容及び実施の趣旨を説明したうえで、同意した学生を対象に実施した。自由記載の内容に関しても講義の改善のために活用するものであり、成績評価等とは無関係である旨説明した。

4. 研究結果

1年次のソーシャルワーク論 でねらいとした「人の意見を聞きながら自分の考えを深める力」は4.1(1位)であり他の2科目より高評価であった。

2年次の福祉行財政論でのねらいとした「理論や法・制度を関連付けて考える力」は、3.9(2位)、「社会問題へ関心を持つ力」は4.1(1位)、「関心を持ったことについて文献などの資料を収集する力」は4.1(1位)、「文献などを活用して考えをまとめあげる力」は3.5(1位)、「自分の考えを文章にする力」3.8(1位)であり、「理論や法・制度を関連付けて考える力」以外は他の2科目より高評価であった。

3年次の公的扶助論でのねらいとした「法・制度の課題を発見する力」は3.7(1位)、「法・制度の課題を改善する力」は3.3(1位)、「現代社会の課題を理論や法・制度とつなげ解決方法を考える力」は3.5(1位)であったが、「利用者の最善を考える力」は3.6(2位)、「自分の考えを人に伝える力」は3.3(3位)、「議論する力」は2.9(3位)という結果となった。

概ね、各講義科目でのねらいとした力を養うのに役立ったという結果となったが、公的扶助論でのねらいである「利用者の最善を考える力」、「自分の考えを人に伝える力」、「議論する力」が、それぞれ3.6(2位)、3.3(3位)、2.9(3位)となった。この理由としては、現在履修中であり、考えを自発的に発表し議論するまでに至っていないことが考えられる。よって、これら3項目の力を身につけることができるよう、今後の授業展開において、より一層の工夫が必要と考える。

この授業展開に関して、妻鹿の提起する哲学的思想を取り入れることの可能性について述べる。たとえば、「対話において意見をつき合わせることで蓋然的な結論を導き出す討論術や完全知としての理性=真理を探究する弁論術をとおしての善く生きることの中の哲学を考える」というアリストテレスの討論術や弁論術は、「自分の考えを人に伝える力」や「議論する力」につながる。また、「実践においてこそ、人間の人間性は賭けられており、その命運が決する」(「私は何をすべきか」)というカントの批判哲学は、「法・制度の課題を発見する力」、「法・制度の課題を改善する力」、「現代社会の課題を理論や法・制度とつなげ解決方法を考える力」などにつながる。

このように、「哲学的思考方法」を取り入れることは、理論と実践をつなぐ課題解決能力を段階的に修得するための「思考」型授業のデザインに効果的であるとともに、その思想を思考の基盤にすえて考えることは大学における実践力養成に効果的であると言える。